

誰一人として取り残さない 防災まちづくり!

熊本県荒尾市 あらお防災人の会
甲木 喜一郎



1 はじめに

荒尾市は、熊本県北西部に位置し、福岡県と接しています。人口5万人弱、24,002世帯(令和5年4月現在)。市域は東西 10km、南北 7.5km、東部には市最高峰の小岱山(501m)を擁し、西の有明海へとなだらかな丘陵が起伏しています。市北部には有明海に注ぐ二級河川 関川が流れています。

明治・大正・昭和時代に石炭で栄えた本市には、世界遺産明治日本の産業革命遺産「万田坑」があります。また、日本の干潟の総面積の40%に及ぶ、ラムサール条約に登録された「荒尾干潟」や、令和4年に「野原八幡宮 風流」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。

2 あらお防災人の会のあゆみ

本市はこれまで「災害の少ないまち」であるという風潮があり、防災意識の低い土地柄でした。熊本地震発生後も、防災活動が叫ばれていましたが、行政以外に支援する団体がない状況で、防災活動への支援の広がりが必要でした。また、2017年の九州北部豪雨と災害が続ぎ、本市でも市民の防災意識を高めようと、防災士の活動の受け皿にもなる団体として、2018年6月「あらお防災人の会」の設立に至りました。

設立当初は防災士だけではなく、看護師・消防団員・料理専門家など、幅広く防災に関心があり、ボランティア活動に理解と協力していただける人材で設立しまし

た。現在13名、(男性9名・女性4名)最年少は女子中学生で活動を行っていて、全員防災士の資格を取得します。

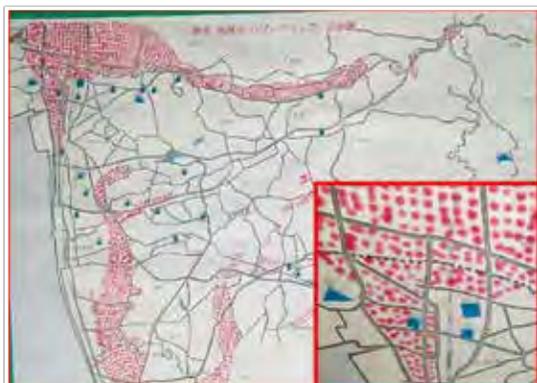
3 活動の内容

「あらお防災人の会」は、設立時に「誰一人として取り残さない防災まちづくり!」をミッションとして立ち上げ、それぞれが達成のために自己研鑽し邁進してきました。

主な活動内容は、地域での防災啓発を進めるため、積極的に自治会の会合やサロンに出向き出前講座を開催しています。居住している自治会では、毎月の例会で10分ほどの防災ミニ講話の実施。避難行動要支援者の「個別支援計画」の策定の支援や、防災訓練の助言、防災ニュースの発行(季刊)などを行っています。

そのほか以下の活動を行っています。

- ・災害時要配慮者、特に視覚障がい者の方々への支援として、自分の指で触って自宅及び周辺の避難所・福祉避難所や、洪水危険個所がイメージできる「触るハザードマップ」の作成。防災ハンドブック冊子を音声に変換し、「音声防災マニュアル」CDを作成し配布しました。
- ・メンバーの料理や歌の特技を活かし、熊本地震後の被災地益城町仮設住宅を訪れ慰問しました。
- ・平成28年熊本地震や、平成29年九州北部豪雨の災害ボランティアに従事した経験から、令和2年7月豪雨災害において、荒尾市社会福祉協議会が設置した災害ボ



触るハザードマップ



荒尾市主催 自主防災交流会



荒尾市社協主催 中高生防災講座



益城町仮設住宅 食と歌で慰問

ランティアセンターでの資材部門を担当しました。

- ・熊本県男女共同参画センター主催の「男女共同参画の視点による防災講師養成講座」を受講し終了した者が、男女共同参画の視点からの防災講話を行います。
- ・行政との連携では、防災訓練・防災フェスタ・防災士養成講座・地区防災計画策定に参加協力しました。
- ・熊本県で初の車中泊体験会を「トヨタカローラ荒尾店（実車提供）、のあそびlabo 及びNDF（ながす減災応急手当救命会）」との協働で開催しました。

4 成果

本会は、「誰一人取り残さない防火」というミッション達成のため、多くの団体と連携し、幅広い活動を心がけてきた。

そのため、要配慮者の方の迅速な避難など被害の軽減につながっていると感じています。

また、行政との連携も特に意識しているため、行政の行う事業には積極的に参加協力し、地区防災計画の策定など事業の推進に貢献しているほか、災害時においても災害ボランティアセンターへの支援などを通して復旧復興に寄与しました。

災害ボランティアセンター支援や誰ひとり取り残さない防災活動が評価され、以下の感謝状・表彰に繋がり、今後の活動の糧にしていきたくと思います。

- ・令和2年 荒尾市社会福祉協議会 災害ボランティア感謝状
- ・令和3年 防災功労者 防災担当大臣表彰
- ・令和4年 防災まちづくり大賞 日本防火・防災協会会長賞